

研修6日目。とうとう最後のレッスンの日となりました。午前中の授業は、テクノロジーについてのプレゼンテーションでした。クラスのメンバーでディベートを行い、それぞれの意見を大きな紙にまとめます。生徒さんはこの準備の為に、忙しい合間を縫って課題を進めていました。夕食の後にあるイブニングアクティビティが終わるのは21時を過ぎます。そこから中部生だけでミーティングを行い、消灯時間の23時までは忙しく動いています。限られた時間の中でいかに最大限の成果を残していくのか。このわずかな期間の中で逞しく成長した生徒さんは自分達で考えて実行し、しっかりとプレゼンテーションの中で披露していました。

最後のレッスンが終わり、教室から中庭に移動します。この金曜日でレッスンを終了する生徒に向けた修了式が始まりました。スタッフから一人ずつ名前を呼び上げられ、修了証を受け取ります。学校にいる全ての生徒さんが集合しているので、修了証を受け取るたびに大きな歓声が沸きあがります。スポーツを通して仲良くなったイタリア人の男子。カフェテリアでお喋りしながら共に食事をとっていたコロンビア人の女子。ボストンに着いた頃は何を話しかけて良いか分からずに遠くから眺めていただけの中部生が、今では肩を抱き合いお互いの卒業を共に喜びます。

感動冷めやらぬ間に、次のプログラムに移動しました。本日はダナ・ファーバー癌研究所で日本人医師であり研究者の菊地先生からレクチャーを受けました。先生からは事前に課題を渡されており、治験について書かれた記事を読み自分の意見をまとめてきました。菊地先生は、洛星中学・高等学校を卒業された後、京都大学医学部に進学されました。日本国内での勤務を経験された後、がんの研究をする為にアメリカに来られました。課題をもとに、「治験とは何か」というテーマを話し合います。なぜ治験が必要なのか、どのようなステップを踏んでいくのか、治験を行う際のルールは何か。生徒さんの中には医療に興味がない人も当然いるので、治験について深く考えた経験はなかったことでしょう。菊地先生とのディスカッションやレクチャーを通して、徐々に理解が深まります。先生が「何か質問は？」というと、我も我もと手が挙がります。もっと話を聞きたい、もっと自分の考えを聞いて欲しい。この瞬間を無駄にしないようにという思いが強く伝わった瞬間でした。その様子に驚かれた先生からは「とても積極的な生徒さんですね。」とお褒めの言葉を頂きました。研究所を案内して下さった方は「こんなに発言をする高校生は滅多にいない！」と何度も仰るほどでした。

振り返ってみれば、最初からこうだったわけではありません。ゲストに対しての関心を表現しない、質問をしない、挙句の果てにレクチャー中に居眠りをする。そうした姿も事実あったのです。しかし、「このままでいいのだろうか」と問いかけてから、態度が大きく変わりました。昨日行われた松川原氏のレクチャーと同様、自分の意見を躊躇せずに表現するようになりました。そして何よりの変化は、自分達自身がそれを楽しんでいくことです。ゲストのレクチャーを受けている間、寮で留学生と接している姿は、本当に楽しそうな表情をしています。「やらなければ！」ではなく「やったら楽しいからもっとやりたい！」という気持ちが伝わってくるのです。この気持ちがあれば、日本に帰ってからも、きっとやり続けていられることと思います。

昨夜のRed Sox戦に続き、今夜は有志が集まってミュージカル「アラジン」を見に行きました。明 由梨さんを中心に、チケットの手配、劇場までの経路、参加者のとりまとめを自分達で行ってもらいました。行く時は少し不安そうな表情も見られましたが、帰宅した頃にはキラキラした顔で「行って良かった！」と口々に

話してくれました。もうボストンの街を歩くのは問題ないようです。明日の班別自由行動も、自分達だけでしっかりとやり遂げてくれるでしょう。以上、本日のご報告とさせていただきます。

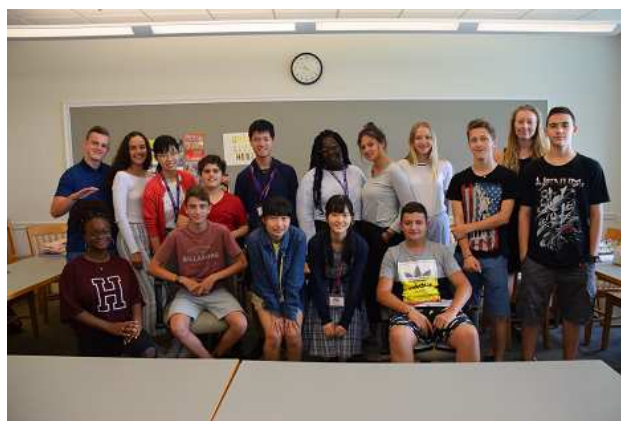
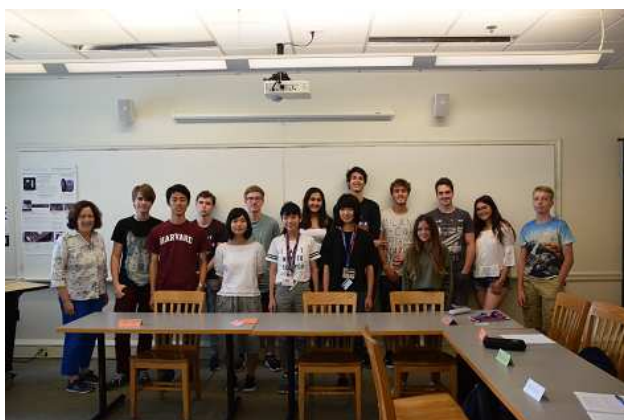
終了式の会場



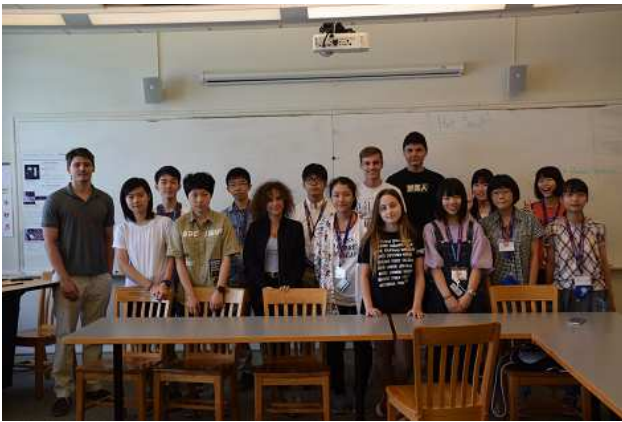
授与式



各クラス







ダナ・ファーバー癌研究所での菊地先生レクチャー

